

て、此小冊子には、飯を食はずして腹の減らぬ法、衣服を着ずして身體の温き法、一日に金が何拾萬圓でも出来る法との、三大秘術が書いてある、定價は僅かに拾錢の大安賣だ、御當地はいよく今日限り……、

と、大法螺を吹き立てるから、我もくと拾錢を投じて買ふて見る、而して其小冊子を開いてみると、左の通り記してある、
一 飯を喰はずして腹の減らぬ法は、餅を食ふべし
二 着物を着ずして温かなる法は、湯に入るべし
三 一日に金が何拾萬圓でも出来る法は半紙を紙幣の如くに切りて、百圓千圓と自ら書くべし、一日に何拾萬圓

でも出来るなり

と書いてありた、買ふた者は皆啞然として、何の事だい馬鹿くしいとつぶやいて居る、

處が其次にある問答が面白い、「問て曰く」として、飯を食はずして腹の減らぬ法には餅を喰へ、着物を着ずして温かなる法には湯に入れ、これは如何にも御も最千萬であるが、第三の條目に付て不審がある、一日に金を何拾萬圓でも出来る法と云ふに、半紙を紙幣の如くに切りて、百圓千圓と自ら書けとのことであるが、其様な手作りの紙幣はつかわれぬでなひかと問へば其答に「答て曰く、つかう様な事では金満家にはならぬ、に

ぎりたなら離さぬと云ふが金持になる秘術ぢや」と書いてあり
たでます〜驚いた、

一四 文明の利器と其應用

或田舎の利口そうな男が、獨り心の中で、日本も忍らい文明
國になりたからには、我々は文明國の人民と云ふものだ。已に
文明國の人になりたからには、文明の利器と云はれる鐵道や電
信を知らなくては御話にならなぬ、これはど耻かしいことはな
ぬと云ふものだ、幸ひこれらの村へも今度停車場が出来たし、電
信局もねかれて、しかもどちららも今日は開業式と云ふのである
からには、一つ此の文明の利器を使ふて見る時節が到来したと

申すもの、こんな嬉しいことはなぬ、こゝろ獨り合點をして、先
づ第一に電信局の受付へ行いて

「モシ〜、電信を一つかけて下さい」

「ハイ、頼信紙を上げませうか」

「頼信紙チウな何ですか」

「此紙に電信の言葉と、宛名とを書くのです」

「どうも始めて電信をかけるのですから様子が分りませんが
そちらで書いて下さる譯にはまゐりますまいか」

「それは書いて上てもよろしい、何處へ何と云ふてやるので
すか」

「ハイどこでもよろしいのですが……」

「どこでもよいと云ふ様な電信のかけ様はありませんね、一体どうゆう用事なのですか」

「別に何にも用はなるのですけれども、とにかく文明の利器と云はれる電信が、此村でもかけられるとに成たと云ものですから、一つどこかへ何とか掛けてみたいと思ふのです」

電信局長は、これは氣狂だなど氣がついたから、

「能くまあ其かける所とかける用事を考へて、又御出てになるがよいでせう」

斯う云はれてみれば、文明の利器を使ふのも中々面倒なものだ

と思ふた様な顔をして、

「そんなら又まいりませう」

と云つて電信局を飛び出して、今度は鐵道の方を試みようと思ふので、停車場へかれつけた、出札口へ行いて、

「切符を下さい」

「二等ですか、三等ですか」

「何等でもよいのです」

「どこへ行くのです」

「どこでもよろしい」

「どこでも何等でも好いでは分りません乎」

「此汽車は一体どこまで行くのです」

「西は神戸まで、それから山陽九州に接続すれば長崎まで、東は新橋まで、それから日鐵に接続すれば青森まで往きます」

「なるほど、それではどうしよかな、長崎へも行いて見たいが東京へも行ってみたい、とにかく両方買て見やう、どうぞ長崎と東京と両方下さい」

「何等です」

「一番ゑらいのを下さい」

とうとう大金を拂つて二枚の一等切符を持てれる、其内に上り下りすれ違ひの驛だから、一處に開札をした、「上りの方は向ふ

側、下りの方はこちらでよろしい」と驛夫の云ふのを聞いて、

「どちらに乗りたらよいかしらん、向ふ側へ行くのも面倒だから、下りの方にしよう」サアこれから神戸の乗りかへ、門司の乗りかへ、滑稽に滑稽を演じて長崎へ着いた、停車場を出てみたが、用事があるでもなければ知人があるでもなる、停車場前の茶店に腰をかけて考へて見たが、別に工夫もつかず、

「もし、東京の方へ行く汽車は何時に出ますかな」

「明朝六時です」

「それでは今晚こちらで泊らせてもらいたい」

「手前方では御泊りは致しません」

其晩は何處で夜を明したか知らんが、翌朝六時に停車場へ出て来て、改札口へ行って切符を出すぞ、

「此切符は五七日前に東海線の其驛にて出した古切符です、

この切符はどうしようかと云ふのです」

「ハテナ、そんな約束でなかりたに」

と獨り言を云ふても何の効もない、さら／＼文明の利器も案外につまらぬものであるとつぶやいた、

これは鋭利なる教育と云ふ器械を、何の爲めと云ふ目的も立てず、主義もなく、どこへ何とでもよいからとにかく電信をかけて下さいと云ふ有様、誰に何の用があるかと云ふのでもなく、

とにかく汽車に乗りてあるくと云ふ景況で、わけもなく人間が利口にはなりたが、利口になればなる程、身は修らず家は齋はず、社會國家の厄介物ばかり殖ねると云ふに喩へたものである

一五 年弱の八十

「婆様は子の子を負ふて孫々し」と川柳子のよまれた如く、

孫の守りして婆様が遊んでねりました、

隣家の女房が孫の頭をなで、「オ、可愛らしい御嬢さんです子、御年は幾歳」と尋ねましたから、婆「年弱の三ッですよ」と答へた、女房「年弱の三ッにしては中々御賢いです子」と褒め立てた、

孫が年弱の三ツと云ふて褒められましたのが、婆も羨ましくなりたと思へて斯ふ云ふたさうです、「私も今年は年弱の八十でございませうが、また中々壯健です」と、年弱とか年強とか云ふのは、二ツ三ツの愛嬌盛りの事で、七十八十になりたら、年弱も年強でありたものぢやない、

一六 二人醫師

或處に二人の醫師がありたが、互に軒を并べて開業した、東隣は醫學博士テフ金看板があるゆへか、患者は日々立關にれしかけて來り、門前市をなすとも云ふべき盛況なるに引かへ、西隣は平凡なる藪醫者の事として、いつも閑呼鳥がなく程の淋みし

さ、其僻偏執心は中々強い、惜いは東隣りの博士め、何か凶事のあれかしと、始終心に祈りて居たが、或時博士の家は火難に逢ふて全焼となりた、西隣の藪醫者は非常に喜び、これでこそ日頃の本望が達したと云ふて、内々祝杯を擧げて居た、然るに博士は焼跡に板圍ひをいたしたが、其表に藪醫者は左の狂歌を讀みて紙に記し、夜中ひそかに其板圍ひの上に張りつけた、博士殿如何に御さじがまわるとて

家の黒焼なに用ゐる

翌朝、東隣の博士は此歌を見て、これは定めて西隣りの藪醫者の所爲であらうと思ひ、直に左の如く、返歌を認めた、

黒焼は大工左官の腹薬

世上の人の氣つけにもなる

一七 貧乏士族の迎春

貧乏士族が夫婦わびしき住居をしてねりましたが、「餅つかず門松立てすシメ張らす、かゝる家にも春は來にけり」で、新玉の初春を迎へたに付て、主人は零落して居ても風流氣質はのきませぬから、

又一ッ年を迎へし玉の春

と云ふ和歌の上の句を詠みて、妻に其下の句をつけよと命じました、妻は歌道の素養もなき人ですれど、主人の仰せいなむ譯

にもゆかず、早速に

今年も餅を買ふて喰ふなり

とつけました、主人曰く、其様な俗な事を云ふては折角の上の句につかぬ、妻曰く、つかぬから買ふて喰ふのです、つきさへすれば買はいでもよいのですけれど……」と答へたそなた、

一八 花魁の由來

狐と云ふ動物は、人を欺くを以て快心の事としてれるのじや而して其欺く手段としては、尾を左右に掉つて、其目的を達するのである、娼妓が手練手管で人を欺き、傾城の涙で倉の屋根がもる、其生血を絞り取ることは、能く狐の人を欺くに類して

居る、されども娼妓の人を欺くは、嬌舌能く辨じ、嘘八百を并べたてるのみで、更に狐の様に尾を掉つて欺くの要なし、故に娼妓の事を、尾入らぬ「花魁」と云ふのぢやと、村夫子は鹿つ目らしく辨じ立てた、

一九 一念は多念の初め

或人、知らぬ道を行くにフト疑を起して、コハ道が違ひしかと思ふて居たれば、其處へ又一人來りて道連れになろうと云ふ、其人思へらく、さて恐くはコハ狐ならん、此奴にたまされてはならぬ」と、茲に一念疑心を起したれば、其人の云ふこと爲すことが皆狐の様に思はれてならぬ、故にしばし思案せんと

て石に腰かけて一休すれば、此連れも其處に休み、そうして袖より竹皮包をとりいだして、彼方も一ツ御あがり云ふて差出す、其人ますく疑心を起し、こは祿なものではあるまい、全くの狐なりと信じきりたり、かくて互に問答は初りぬ、(甲)あの鼠の油揚は甘いか、(乙)一向食たことは御座らぬ、(甲)稻荷の鳥居は飛び起しにくいもので御座らう、(乙)私はまだ稻荷へ参詣したことがありませぬ、其時甲は此奴はまだ官をせぬ野狐ならんと思ひ、エ一栖み所は藪がよろしいか谷がよろしいかと問へば乙は妙な問を發する奴かな、コハ必ず狂人とみねる、さりながら格別悪さもせぬ様なれば道連れとしてやろうと考へ、ハイ私

は濱邊に住居して居ます、藪は竹の子の生へ時はよろしいが夏は蚊が澤山居ませう、(甲)貴公は犬は恐ろしくないか、(乙)大奴でござる、併し中には随分恐るべき犬も居ませう、(甲)彼處の茶屋に揚豆腐が煮てあるが、あの揚たてを一ツたべやうではないか、(乙)私 は癩氣持で揚ものは好まぬと答ふ、茶屋の庭に犬がねていてもさまで恐ろしからぬ、そこで「御前は狐でないかみねる」と云ふたれば、「貴公さきから尋ねることが一々變なことはかりである故に、狂人かと思ふて居たが、狂人ではなさそうである」と茲に初めて相互の疑念を晴らしたと云ふことである、一方は狐と疑ひ、一方は狂人と疑ひ、一里餘の道を両方とも真

の人間と思はざりしは、即ち一念の疑を起したる爲めに、多念競ふて起り來りたるによるなり、故に經に曰く、

- 一念は多念の初めなり
- 多念は一念のつもれるなり
- 一念不定なれば念々皆不定なり
- 一念治定なれば念々又治定なり

と、されば何事にて、最初の一念は慎むべきことにこそ、

二〇 八萬歳の七億婆

江州八幡と云へば、江州商人の巢窟であるが、其八幡の町端れの散髪屋にて若い者が四五人寄り集り、町内に於ける長壽

者の噂をしてれる、「酒屋の爺さんは今年が八十八ちや」、「米屋の婆さんは來年が九十ちや」、「何處やらに九十三の人がある」、「彼處には九十五の人がある」など、頻りに云ひ并べてれる處へ、風呂敷づゝみを負ひたる、身なりの賤しき老婆の來るを見て、若い者が「婆さん、御前は幾つちやな」と問ひしに、婆「私か、私は八幡在の質置婆（八萬在の七億婆）ちやと云ふたので、皆々あきれかへりた、

二 蜀山人の禁酒

蜀山人、禁酒を思ひ立ちて、左の如く詠じ斷然實行せり、
くろがねの門より高きわが禁酒

ならば手柄にやぶれ朝比奈

數日の後、再び酒をのみはじめて

わが禁酒やぶれ衣になりけり

ヤヨついでくれヤヨさしてくれ

三 債鬼の包圍攻撃

「ちやに依て常が大事ぞ年の暮」、年末になりてから債鬼にせめてたてられ、ア、悪るかりたど氣がついてもねぞい、米屋酒屋新屋八百屋呉服屋等が四方八方から包圍攻撃せられ、彼か是かと苦肉の計略、夜の間に棺桶を一ツ求めて來て、自分は棺桶の中で小さくなりてれる、娼は其前で空涙こぼいて香を焚い

て居る、「夜前急病で頓死を致しましたので……」と云ふを口
 實として、續々出て来る債鬼をことごとく追ひ拂ふた、
 やれ／＼これでまづ一ぶくと思ふてれると、其處へ高利貸の
 鬼權がやりて来た、嬢が例の紋切形の口實「夜前急病で頓死を
 致しましたので……」と云へば、「ナニ死んだ、死んだなら仕
 方がない、現世で取れずば未來で取りてやるわい」と云ふた、
 其時棺の中から「未來で拂ふてもよいのなら、もう此上に拾
 圓だけ貸して下さい」と手を出したそなた、

二三 盲人と姓婦

盲目の按摩が豫て得意にして居る家へ行いた、其家の細君が

懐胎中でありましたが、少し手のひけぬ用向があるから、少し
 待て居てくれと云ふ、盲目は待つて居るも退屈なものですから
 コロリと横になりて眠りかけた、女房がそれを見て、
 御前は常住不斷に目を閉ちて居るのに、夫にまだ眠たいか
 と云へば、盲目は手で其女房の腹をなで、
 貴方はこんな大きな腹なれば御飯はあがらぬか、
 と、シツペイ返しをやりて仇討をした、

二四 花嫁と精米

年の若い娘が始めて他人の家へ縁付いた、耻かしいやら怖い
 やら、毎日遠慮して、三度の食事もひかへ目に、三杯たべたい

所も、二杯でこらへて置く様にして、十日二十日と日を経た所が、さあ／＼腹が空で、内證で人の見ぬ間につまみ食ひして、耐へ／＼て居たが、有る日の夕方に人の居らぬを幸ひに、勝手の米櫃から精米を一掴み掴み出して、ローパイに含哺た、生憎そこへ聳さんが外から歸り來り、嫁女の兩の頬べたを一パイに脹らして居るを見て、聳は驚きながら、「和女の頬へは腫物が出たのか」と問はれて、嫁は顔を赤らめて言語を云はず、云はぬ筈ぢや、云ふたら口から米がこばれる、たい耻かしそうにして居るを聳は氣の毒に思ひ、早速母にかくと告れば、兩親は驚き忽ち奥より走り出で、其様子を見て「これは腫物に相違ない、

ぞれ／＼痛みはせぬか」と指にて押へてみれば、兩の頬は石の如く堅くなりて居る故に、「これは大變なる急病」とさわぎ立てば、近所隣の者も聞き傳へ、次第に集り來まして、何はともあれ早く御醫者を迎へて治療を施すが專一ならんと、早速醫師へ知らせければ、醫師は直に走り來りて、先づ兩の手の脈をとり夫から兩の頬をれさへてみれば、通常の腫物とは思はれぬ、一應口中を伺ひ見んとて、口を開かさんとすれども、容易に口を開けぬ、是非にぞて無理に口を開かせたれば、内からバラ／＼と出た、皆精米を吐き出してしまへば、跡は何の腫物でも何でもない、大勢寄り集りた者が之を見て、笑ふあり、嘲あり、

大勢の中で赤恥をかいたとある、世間の萬事皆此様なものにて凡夫の習ひ一時の出来心にて、悪事をなすこともあれども悪事と氣がついたら直に御懺悔するがよい、過ては改むるに憚るなかれ、松の雪拂へばもとの緑かな、我輩に見付けられた時に自首して悔懺さへすれば、夫婦兩人の中だけですむのに、罪を覆ひ非を隠した故に、遂に近所隣の大勢の人中で、あられぬ赤恥をかいたのぢや、

二五 躰の川渡り

連日の霖雨に小川々々の水増して、田舎道の小橋は皆流失して仕舞ふたから、川向ひへ行くには是非とも渡らねばならず、

水心はなし、土地は不案内なり、如何せん不圖川中を見れば旅人一人衣類を頭に載せ、せつくと向ふへ渡りゆくから、彼も人なり我も人なり、たとひ水練は知らずとも、何條これ程の川を渡り得ざらんやと、丸裸になり、衣類は首に括りつけ、心に金比羅を念じ奉り、水に入りしに、神明の加護力にや、先に渡りし入は肩まで水に入りしのみならず、頗る渡り苦しげなるに、夫に引替へ自分は足の三里までしか水につからず、やすくと向ふの川岸に着し、ヤレ嬉しやと衣類を着し、遙に象頭山金比羅大権現を拜して其神徳を謝し奉りた、フト先に渡り居りし人を見れば、肩まで水に入りしも道理、この人は躰であ

りたのぢや、

二六 居眠りの失敗

婆さんと娘と二人暮しの中へ隣村から養子を取りました、或日の夕方に、彼娘は明日の御膳の用意に麥を焚いて居りました一日耕作の疲れて、遂に居眠りを始めました、彼の大風の唐茄棚を見るように頃をフラリ／＼と振りて居る内に、釜屋の火は益盛になる、頭の髪に火が付さそうで危い處を、彼の婆さんが手炙火鉢をかゝへて、芋を續んで居て見付けた、なにかまた養子を貰つた當分なれば、居眠りをして居る娘を起すも耻かしかるであらうと思ひ目を放さずに見て居りました、又養子息子

は庭の隅で草鞋を造て居ました、彼娘の居眠りを見付けて、横目に見ながら草鞋を造りて居ました、其中に釜の麥はぐつくと煮ねあがり、暫くすると麥のこげつき臭い香ひがする、フト娘が目をさまし、釜の蓋を取りてみれば、麥は眞黒焦げになりて仕舞ふた、又婆さんも娘の居眠りに心を奪はれて居た故、手炙り火鉢の中へ芋を續み込んで片端から皆焼けて仕舞ふた、養子息子も娘の居眠りばかりに氣を付けて居たゆへに、乳のない草鞋をつくりはくことがならぬ、娘の居眠りから三人の仕事が皆残らず駄目になりたとある、一人居眠りをすると、衆人の妨をする様になる者ぢや、

朝寝して夜る寝るまでに書寝して

起て居る間は居眠りをする

二七 ハイカラ先生

ハイカラ先生曰く、僕だつて英語のすこし位は知りて居るよ
ラブとは戀、グールドバイは左様なら、ランプにエツプ、ステー
シヨン、ビールにブランドーベルモット、ソツプにピフテキ、
ヒーロー、サンライス……と、頻りに饒舌り立てますから、
友人が傍から、オイ／＼ソウべろ／＼と知りて居ることだけ饒
舌りてはこまる、僕が問ふて試験するから、返答せよ、第一に
猫を英語では何と云ふか、ハイカラ「キャット」よ友人「ソウ

ダ中々能く知りて居る、それでは鼠はと云へば、ハイカラはぐ
つと行きつまり、鼠はベストよと答へたそうな、

二八 客齋爺

意地きたない胴慾で爪に火をとぼすのをさへ何とも思はぬ客
齋爺、夜、客の歸るのを送り出しても燈を持て来ず、もし
客が下駄が知れませぬと云ふとそれなら、頭をそこらの壁にて
打ちつけて眼から火を出して御覽なさいと云ふ程の強慾さ加減
まづ古今無類、三庄太夫も三舎を避け、木村権右衛門も跣足で
飛び出す程でありた、或時人の家に招かれてゆくとき、小僧を
呼ひつけて云ふには、「今夜迎ひに来る時、提燈にワザト蠟燭を

さす、忘れて来た様なふりをするがよい、そうすれば彼方の家でもキツト蠟燭を一本くれるから、却て徳になる」と、懇々云ひふくめてくれました。

さて退散の時刻になり小僧が迎ひに来て、サア御暇ませうと云ふ段になると、小僧はしくしくと泣き出して、起ようともしない、そこで吝嗇爺、小僧はやく提燈をつけよと云ふと、小僧はソツト傍にすりより、耳に口をつけて蚊の様な聲で、「不調法をしましたが、ドウゾ堪忍して下さい、言ひつけられたことすツかり忘れて、蠟燭は家から持ちて来ました、どうしませう」と泣きながらわびを云たげな、

二九 盲人同士

盲人同士が途中でバツタリ行き當り、

甲「目あきの分際として已れになせ行き當りた、サア了簡せぬと云へば、

乙「御前も盲目か、れれも盲目ぢや、

甲「そう云ふ聲は龜の市ぢやないか、已れは百の市ぢや、

乙「これは珍らしい、

甲「そうとは知らず先刻からの過言無禮ゆるしやれ、

乙「それは御互ひ、イヤこう云ふ不調法がなくなば、御目にはかゝられぬわい、

三〇 伶人の商賣

徳川幕府時代には伶人と云ふて音楽を司る家がありて、其の増上寺や上野の東叡山などで將軍家の法事のつとまる折は、其伶人が御靈屋へ出張して、簫や箏篋を吹き太鼓や鉦鉦などを鳴らし、音楽を奏するのが其家の職業であり、御一新の際に當りて、一旦幕府の變動より其伶人が皆廢せられて、それ皆歸農又は歸商した、サテハヤ今迄笛ばかり吹いて居た人達ゆへに商賣の道に愚かにして、これと云ふ手慣れた職業もない處から、兩三人申し合せて、一人は焼麩やら又生麩などを握へることを習ひ覺悟、又一人は細工物に器用な性質の人なれば

これは女中衆が機を織る時に絲を左右へ通はす杼と云ふものを作るを業とし、又一人はチト不器用なものともみへて炭團をつくり之を店へ并べて売いた、併しながら三人共に品物がはかしく賣れぬ所から、又三人が申し合せて、市中の所々方々と賣に出かけた、一人は先へ立つて杼を背負ふて「杼々」と呼ばば次の人が麩を荷ひて「麩々」と云ふ、すると後口から天秤棒の兩端へ炭團を入れてある籠を荷ひて、「炭團々々」と囃した、丁度以前の伶人でありた時の通り、杼々、麩々、炭團々々と囃し立て、東京の市中を毎日賣りにあるいたと云ふことじや、習ひ性となるとは此事であらう、

三一 製圖家と人力車夫

書生二三人寄り合ひ、製圖の話が始まりた、

甲「平面は兎も角、河流の側面には閉口する、

乙「イヤ、僕は山がひきにくい、

と云へば、側に居る給仕の小僧が、

甲「山は引にくいそうすナア、内の親父もよくそう申してれ

ります、

乙「それ前の親父も製圖家か、

小僧「イエ人力車夫でございます、

三二 堂上家の令嬢

至りて貧乏なる堂上家の令嬢が、或時に下婢の女中に向ふて
云はるゝには「もし自身が財産を澤山に持つ様になりたら、銅
盤を幾多も買ひたい」と申さるゝゆへ、下婢は不審に思ひ、「其
様に銅盤を澤山御買なされて何に遊ばしますぞ」と問へば、令
嬢の御答へ遊ばすよう「さればのことよ、雨の降る時に、雨漏
りを受けるに用いるのよ」と云はれたとある、

三三 角圓長短

三十一文字の中に、角圓長短を讀み込みたる、

丸○盆○に○豆○腐○半○ち○や○う○持○つ○跛○足○

ま○ろ○く○四○角○で○長○く○短○か○し○

る云へる狂歌をイト巧みなりと思ひしに、武者小松實陰の詠じたるならん、上品にして巧みなるあり、

月を汲むかさね井筒の繩釣瓶

まるく四角でながく短し

三四

極端なる西洋嫌ひ

極端なる西洋嫌ひの頑固翁あり、青年の者が巻煙草をすうを見て云ひけるは、「君等が巻煙草を吸うを見るに、四分の一ほどは吸はずして棄つる様子なるが、それは全分吸ふことのならぬ仕掛のものゆへに棄つるなるべし、一日に一本二寸の紙巻二十本づゝ吸うとしても、延長四尺の中の四分の一即ち一尺づゝ棄

つることとなる、誠に惜しき天物を暴殄するのみならずして、其價をも外國人に拂ひ居るものなれば、日本中に君の如く紙巻煙草を吸うもの五百萬人ありとすれば、一日に延長五十萬丈即ち二寸の巻煙草二千五百萬本を空く棄る勘定となる、如何にも不經濟の甚しきにあらずや」と口角沫を飛ばして咄々として罵る、其時青年の一人反問して曰く、「翁が日本流の煙草を吸うをみるに、一服の煙管につめたるものを三分の一は灰吹の中に入れて、空くゆらすものゝ如し、之を日本中に千萬人ありとみれば、何程の不經濟になるべきや、勘定して見玉へ、予が吸ひ居る巻煙草は、舶來の品にあらず、官煙と云ふて政府の商賣

なれば純益の幾分は國庫の收入となるのだから安心し玉へ」と云へば、翁は苦々しき顔をして「舶來でないなら聊か恕すべきであるが、しかし其形ちが西洋臭くてドーモ氣にくわぬ」と負け惜みを云ふたけな。

三五 見通しと夜通し

十二三な腕白小僧が本尊の御前へ拜禮せしに、御佛飯が鼠の爲めに引去られて無くなりてれる、小僧「これは怪しからぬ、如來様、貴方は見通しですのに、ナゼ御取られなされました、チト御監督が不行届では御座いませんか」

と苦情を申せしに、如來は左の如く答へられた、
如來「われは見通しなれど、鼠は夜通しぢやで、われより一段上ぢやから仕方がない」

三六 打出の小槌

物好きな男が大黒様の打出の小槌を貰ふて來た、この打出の小槌と云ふは重寶なもので、何でもかでも思ふものが出て來るのぢや、金と云へば金、米と云へば米、森羅萬象、何でも出ると云ふことぢや、

そこで第一に入用なものが米だと思ふて、「米々」と云ふと果して米が澤山に出た、次に之を入れておくに付て倉庫が入用だ

と思ふて「倉々」と云ふと、又倉が幾棟も出た、今度は米と倉とを一處に云れうと思ふて、「こめぐらく」と云ひしに、小さい十三歳ばかりの小盲目が五十人も六十人も出て来た、一右や左の且那樣、あたやれろそかには頂きません」と云ふた

三七 名古屋城の鯨鯨

甲「敢て悲觀すると云ふではないが、五濁惡時惡世界濁惡邪見の衆生がより集りてれるが、現代の社會であるから、此頃の人間は宛然名古屋城の鯨鯨の様な奴が多いなと云へば、乙「ナニそんな立派な奴があるものか」と云ふ、甲「イヤ立派など云ふことではないが、金故に綱にかゝるから

の事よ、其證據には日々の新聞紙上には三面記事を賑はしてゐるではないか」

三八 學生の饅頭會

學生が四五人寄り集り、下宿屋の樓上にて饅頭會を開催した、饅頭を山の如くもりて盆に載せ、座敷の中に置いて、何か面白い事を云ふて之を食ふ事にした、

- 甲「人形屋の主人、一ツくツたり (人造りたり)
- 乙「新しき鍋、二ツくツたり (蓋造りたり)
- 丙「肴屋の女房、三ツくツたり (身作りたり)
- 丁「農家の豊年、四ツくツたり (世つくりたり)

丙「細君の内性酒、五ツくツたり
(何時造りたり)

筒様に云ひぐさを云ふて喰ふて居たが、甲の學生たまらぬ様になりて、

甲「犢鼻褌の虱、股食ふ(又喰ふ) くくくと云ふて澤山に食たげな、

三九

桃山御殿の柿樹

伏見桃山御殿に天子献上の柿樹あり、子を結ぶこと鈴の如し幽齋、一日戯れに之を攀ち、將に之を取らんとする時、豊公様先の障子を開き、

柿の木に人丸くこそ見にけり

こゝが明石のうらの白浪

と詠みたれば、幽齋頭をあげて、

太閤の御庭で耻を柿の本

人丸ならで顔も明石に

と返歌しければ、豊公は大に感賞し、又其才を愛し其罪をゆるなりと云ふ!

四〇

霧中花と鳩般茶

夫婦中よく暮す人がありた、或時夫が外より歸りけるに、妻は籠の下火を焚て居た、夫が之を見打ち守りて、一首の詩を吟じた、

吹^レ火^ヲ朱^唇動^キ添^ヘ薪^ヲ玉^腕斜^ニ
遙^ニ看^レ烟^ヲ裡^ノ面^ヲ大^ニ似^リ霧^中花^一

此詩の意は、初の起句に火を吹けば朱唇動くとは、竈の下
火を盛にせんとして、火吹竹を以て火を吹く景況を云ふ、朱唇
動くは艶麗女の口元やさしくして、朱唇の愛らしきを云ふ
次の承句に薪を添へて玉腕斜なりとは、火も漸く盛にもねて
追々跡より薪を添へるを云ふ、玉腕とは玉の如き白い腕なり、
次の轉句に、遙に烟裡の面を見ればとは、夫と妻との間に竈を
隔てゝあれは、烟を越へて向ふに居る妻の顔を見ると、花の三
月朝霧に隔てられし櫻花を見る様ちやと云ふ結句の意ちや、ナ

ント面白^い詩ではござらぬか、隣の妻が之を聞いて、今隣家にて
は斯の如くして、兎角夫婦の睦まじきは他所の見る目も尚羨
し、御身等が如きは真似もならじと語の末に嘲りければ、夫は
之を聞てそればかりのことはイト易し、其方火を焚いて居れ、
我れ外より來りて詩を作らんと、兼て約束し置て、夫は外へ出
て行けば、妻は釜臺に火を焚き居たりける、夫かへり之を見や
り詩を吟じた、

吹^レ火^ヲ青^唇動^キ添^ヘ薪^ヲ黑^腕斜^ニ
遙^ニ看^レ烟^ヲ裡^ノ面^ヲ恰^モ似^リ鳩^般茶^一
此詩の意は前と反對にて、女房の醜^き姿を罵倒して作りた詩

ぢや、初の句に火を吹て青唇動くとは、青唇は青き唇と書いた文字で、芝居でする幽霊の様に二た目と見られぬ青さめた顔と云ふことろぢや、次の承句に、薪を添へて黒腕斜なりとは、黒腕は垢じみた午房の様な真黒な腕と云ふことぢや、轉結の二句に、遙かに烟を隔てたる顔を見れば、其恐ろしさ猶如般茶の如しと云ふ、鳩般茶とは「翻譯名義集」の第二卷鬼神の部に載せてある、至て醜き鬼神の名なりとある、これ我が及ばざることを忘れて、他人の才智を嫉む時は大體皆この様な失錯ぬ多いものぢや、

四一 歐米通

二口目には歐米々々頻りに歐米心醉家を以て自任する、ハイカラ先生あり、其人或時、衛生會の演説に、「人間の足は二本あるに依りて洋服の様に二本別々に包んであれば、起居動作にも便利でありて衛生の爲めになる、然るに日本服は廣い衣服で二本を一ツに包んで居る、それだから起居にも不自由で衛生の害になり、歐米の人が日本服を見たならば、日本人は足が一本しかないのであろうかと怪むであらう」と勢込んで雄辨を振ふた、時に聴衆の一人が大聲を發して問ふて曰く、「それでは歐米の婦人は一本足でありますか、辨士たるハイカラ先生、急所をねさへられてギツクリ言句につまり、頻りに水を呑むこと二

三升、

六〇〇

四二

姦夫姦婦

不貞腐りた女房がありましたたが、亭主が他行すると云ふと、姦夫を引き入れて不義の快樂を貪りて居る、それが度重りて、「村中で知らぬは亭主たゞ一人」と云ふ有様となりたが、遂には其亭主も薄々さとりまして、何でも現場を取れさへ有夫姦の告發をしてやろうと思ひ、一夜泊りで旅行すると云ふて宅を出た、女房はやれ／＼うれしやと思ふて黄昏より姦夫を引き入れて楽しんで居りた、處が午後十時頃にドン／＼と表の戸を叩くものがある、「誰ぢや」と問へば、「オレぢや早くあけよ／＼」と云

ふ正しく亭主の聲、「サア大變ぢや」逃げる處もなければ隠れら場處もない、仕方がないものであるから、米を買ふて来た大きな袋の中へ這入らせて置いて、表の戸をあけた、亭主は早速に内へ這入りたが別にかわりた模様もない、じろ／＼と見回して居たが、遂に米袋に目をつけて、「これは何ぢや」と問へば女房は返事にこまり、「それは何です」と云ふたきり、もじ／＼してゐる、亭主はます／＼はげしく、「これは何ぢや早く答へぬか」と云へば、姦夫はたまらぬ様になり、袋の中から「米ぢや／＼」と云ふたそうな、

四三

説教僧

中々笑 林

八〇一

説教僧が田舎へ布教にゆきました、宿寺の世話方が出て来て申しますには、「此地方は涙のこぼれる様な因縁を好みますからドカ阿波重か石堂丸か、何でもよろしいが憐れな處を今晚は一席願ひます」と云ふて願ふて出た、説教僧も「よし、承知した、なるだけ涙のこぼれ相な處を語るから、御前も高座の前へまいりて同行總代となりて泣かねばならぬぞや」、「ハイ、餘の人は兎も角、私が第一番になりて泣きます」と契約したさて時刻が來まして客僧が高座へ上ると、五六十人の老若男女が南無を低唱しつゝ、謹聴して居る、讀題から序辨を終り、説教はますます佳境に入りて、得意の廣長舌を弄して、憐れな

る因縁話を語りましたが、誰一人として涙をこぼす者がありませぬ、今の世話方の爺は如何と思つて見ますと、フラフラと眠りてれる、客僧は之をみるなり、「コン、御世話方、憐れな因縁ぢやがな、泣かぬか」と云ふと、世話方は「目をさまし、忘れて居りたア」と泣き出したそうです、

四四 浅草の観音

浅草の観音様は、一寸八分の小さき御姿なれど御本尊なり、二王様は大きな体なれども門番なり、二王は平生より不平に堪へず、もすこし上役に引上げて下されてもよかりそうなものぢやに、昔かられは門番、観音は何ぢやい小さい体で本尊顔で

威張りたることの心憎くさよと思ふてれども、さながら口へ出すことならず、不愉快ながらに任務をつとめて居りた、或日の事 観音様は未明に起きて境内を散歩してござりたが、どうしたはずみやら、ブツと放屁せられた、二王はこゝぞ平素の不平のもらし處ぞと、あてこすりに、

浅草（あゝ臭さ）

と云ふたら、観音様は後をむいて、

仁王（にほう）か

と云はれた、實に賣言葉に買言葉である、

四五 丁稚の猿智恵

樂隠居が丁稚の長吉に向ふて、「何處かの店へ行って、「夏の夜」を買ふて来い」と命じました、丁稚は中々我慢な奴で、小ざかしき猿智恵のあるものですから、「ハイ」と云ふて飛び出した、けれども「夏の夜」と云ふことに合點が行かぬ、呉服屋で尋ても、賣薬店で聞ても、荒物屋八百屋ありとあらゆる店を尋ねるけれど、「夏の夜」と云ふ物は名も聞いたことがないと云ふ、サア困りた、此まゝ素手で歸りたら隠居様や店の衆に笑はれる、夫が首を切らるゝより残念だ、何でもかでも笑はれぬ様にせねばならぬと、千思萬考した結果、極上の三益白を壹錢の價だけ買ひ求め、誠に少しの目薬程の三益白を紙に包んで恭しく持

てかへりた、「御隠居様、「夏の夜」を買ふて来ました」と差出したゆへ、「それは御苦勞でありた、すぐ賞味しよう」とて紙包みを開けば、三益白が少しばかりある、「長吉、これは三益白の砂糖ぢやないか、なんで之が夏の夜ぢや」、「さようです、砂糖が少しで、トねぶり、夏の夜は短いで、トねむりでございます」と猿智恵を活動させて非常なる名譽を得たとある。

四六 町内若連中

女學生上りの御轉婆娘が、何處の野郎と野合ふたやら私生兒をばらんだ、二月三月は袖でも隠くされるが、月日に關守なきと同時に、ね腹も段々大きくなる、母親はそれと見て取り、大

に／＼心配して、或日良人に此事を話した、良人は中々事のよく分かった人であるから、此不始末の次第をきいて、今更怒りた處が仕方はないから、既往はとがめずとして、無事に産をさせるがよい、身二つになりた上で、機會を見て十二分に意見をするから……と、存外さばけた良人の言に、妻は飛立つ程にうれしく、其趣を娘にもさかせて、ともかく波風立てずに産をさせることになりた、さていよく月が満ち産の紐を解いて、愛らしき赤兒が生れた、赤兒の顔を見ると云ふと兩親とも大に喜びましたが、或日の事、赤兒に湯をつかわせて居たら、腹部に何から薄く文字があらわれて居る、よく／＼見ると「御神燈」

と書いてある、父親はこれを見えます、喜び、この子は神様に違ひないと云ふて非常に大切に育て居た、それから二三日たちて、又湯をつかわせたが、脊にも何やら文字があらわれてる、よくくみると「町内若連中」と書いてありたと云ふことぢや、

兩親の監督が不行届であること、大事にかけて育て娘も、町内若連中の慰み物になると云ふ訓めの話である、

四七 強慾爺の臨終

強慾非道なる吝嗇爺が、非常の大患に罹りて、れいゝ危篤に迫り、今や臨終とも云ふべき危機一髪の際、枕邊に集れる家

族に向ふて曰く、

これの息の根が絶へたら、もしランプの火を小さくして
れけよ、石油が高いから……、

と云ふたそなた、臨終の一言を以て其人の性行を知ることが出来る
ると云ふが、吝嗇爺はごこまでも吝嗇的の言を残して世を去り
たのである、

四八 儒者と乞食

乞食が儒者の門に立ちて、難澁の有様を縷々のべて食を乞ふ
て止まず、儒者其うるさゝに堪へず、一厘錢一個を投げやる、
乞食の曰く、すくなくいな仁

四九

觀月の餘興

八月十五夜の觀月の宴に、大勢の朋友を招き酒肴を取り揃へ
 頓て詩歌俳諧などを始めて、月光を翫ひ居りしか、程無く夜
 も初更の頃に及びしか、彼の白樂天が「十五夜中新有の色、二
 千里外古人の心」と詠せしも、角やあらんと一座の者ども打ち
 興して居りしが、此家の庭の真中に一本の松の木ありて、隈な
 き月の光りなれども、彼の松の樹に障へられて、席を照らさ
 りければ、哀れこの松の樹なからんにはと、つぶやく人のあり
 ければ、其家の妻ホ、ねみて、「あれは女松にてあれば、月の障
 りに侍るなり」と申し、一座の人々も其言に感じて又一層の

興を添へたり、其時隣家の主人も此席に招かれ居たりしが、頓
 て酒散じて家に歸りて、此事を妻に語りて賞めければ、妻は之
 を聞て、斯くばかりの事争か賞むるに足らん、後の月見には我
 家へも朋友を招き玉へ、妻が一興を添へんと云ふに、亭主も我
 妻の如何なる工夫もあらん、イザ試みんと、九月の十三夜に又
 人々を招き、ヤ、亂酒に及ぶ頃、妻はつか／＼と庭の真中へ出
 て、衣物を引きまくり木魚の様な大きな臀肉を突き出して、シ
 ヤア／＼と庭一面を馳せあるいて多くの小便をした、主人は殊
 に興さめて、斯は何事かを尾籠千萬なりと叱りければ、其時妻
 は漸く椽先へ上り來て、「今宵の席の響應なければ、月に乗じて

蛤はまぐりの鹽しほを吹ふく有様ありさまを客人きやくじんに見みせまいらするなり」と云いひければ、一座ざの者ものも皆興みなきようさめて、もの云いふものもなかりたごある、これはあまり尾籠ひろうな話はなしの様やうぢやが、肝心かんしんの聞所きくところに注意ちういを拂はらふてもらいたい、我身わがみの分限ぶんげんを知らずして、他人たにんの才智さいちを蔑如べつじよするご、箇様かやうな失錯しつさくが出来るできるものですから、必ず慎かたらまねばならぬ、

五〇 五錢の買上げに三拾錢の料料

先年せんねん、ベスト問題もんたいさかん盛さかなる時とき、風呂屋ふろやの三助すけ、鼠ねづねを捕獲ほかくし、直すくに之これを派出所はしゆつしよに致いたして、例れいの金五錢かひあの買上げかひあを得ねたり、されど其鼠そのねづみを捕とらへし時とき、喜びよろこのあまり、衣服いふくを着きるを忘わすれ、裸體らたいのまま派出所はしゆつしよに至いたりしを以もつて、終つひに金三拾錢くわれうの料料しよに處しよせられ、差さ

引金ひき貳拾五錢そんの損まねを招まねきたりとは、これ嘗かつて市人しじんの一せふわ笑話われう料たりき「目的てきは手段しゆげんを神聖しんせいにす」と稱しょうするもこの話はなしの中なかにもあらはれたり、

和歌

一 聖德

○今上天皇御製

冬ふかきねやのふすまをかさねても

思ふはしづか夜寒なりけり

○皇后陛下御歌

あやにしきとり重ねても思ふかな

寒さをねはん袖もなき身を

中興和歌

仁徳天皇御製

高き屋にのぼりて見れば烟立つ

民の籠は賑ひにけり

天智天皇御製

秋の田の刈穂の庵のたまあらみ

我が衣手は露にぬれつゝ

後鳥羽天皇御製

夜を寒みねやのふすまのさゆるにも

薬屋の風を思ひこそすれ

後醍醐天皇御製

世治まり民安かれと祈るこそ

わが身につきぬ思ひなりけり

孝明天皇御製

すまし井の水に我が身は沈むとも

にこしはせじなよろづ國人

後醍醐天皇御製

なかくくに人より物を思ふかな

世を思ふ身の心づくしは

伏見天皇御製

徒らに安さわが身ぞはづかしく

苦しむ民の心をもへば

◎後宇多法皇御製

我住めば淋しくもなし山里に

朝まつりごと怠らずして

二 名士の面影

◎源光圀

見ればたゞ何の苦もなき水鳥の

足にひまなき我が思ひかな

◎高山彦九郎

我を我としろしめすかや天皇の

玉の御聲のかゝる嬉しさ

◎長尾爲景

蒼海のありとは知らで苗代の

水の底にも蛙鳴くなり

◎蒲生君平

比叡の山見れるす方ぞあはれなる

今日九重のかすしたらねば

◎徳川秀忠

奥山に心をいれて尋ねずば

ふかき紅葉の色を見まじや

◎伴信友

いまには何をかいはて世の常に

言ひしこと葉ぞ我が心なる

◎北條時頼

幾度かれもひ定めてかはらん

たのむまじきは我心なり

◎北條泰時

事しげき世の習ひこそ物憂けれ

花の散なん春もしられず

◎北條氏輝

天地の清き中より生れ来て

もとの住家にかへるべきなり

◎豊臣秀吉

人は皆さしいづることよかりけり

軍の時も魁をして

◎梅田雲濱

君が代を思ふ心の一筋に

わが身ありとは思はざりけり

◎僧月照

磨き得て國の寶となるものは

人の心の玉にぞありけり

大君の爲めには何か惜からん

薩摩の瀬戸に身は沈むとも

くもりなき心の月の薩摩瀧

神の波間に今ぞ入りぬる

◎大石良雄

ながらへて花を待つべき身ならねど

なほ惜まるゝ年の暮かな

水にうつる花は藻屑に浮きかへて

匂ひばかりを庭の梅が枝

濁り江のにごりに魚はひそむとも

なごかわせみのとらでやむべき

◎武林隆重

天と地の外にあらじな千種だね

もとさく野邊に歸ると思へば

◎神崎則休

世の人の道しわかずは遅くとも

消る雪には踏み迷ふべき

◎木村貞行

武士のみちとばかりを一とすぢに

思おもひたちぬる死し出での山路やまみち

◎前原宗房まへはらむねふさ

はるきぬとさしもしらじな年月としつきの

降ふりゆく人ひとの雪ゆきのしらかみ

◎原元辰はらもとたつ

くるゝとしくるとしわかぬ身みにあれば

心こころにかゝる霞かすみともなし

◎永井雅樂ながゐがらく

君きみが爲ためすつる命いのちは惜たしからで

たゞれもはるゝ國くにの行末ゆくすゑ

◎高野長英かうのながひで

歎なげかるゝ身みよりも歎なげく老おいの身みの

歎なげきこそすれ歎なげかるゝ身みは

◎本居宣長もとのゐりのぶなが

しき島しまの大和心やまとこころを人間ひんごは

朝日あさひに匂におふ山櫻花やまざらくはな

◎久坂通武ひささかみちたけ

斯かくすれば斯かくあるものと知しりながら

止やむにやまれぬ大和やまとたましひ

◎渡邊華山わたなべくわさん

麻あさなは細こにかゝる身みよりも子こを思おもふ

親おやの心こころをどくよしもがな

◎蓮はすだいら田市いち五ご郎らう

むさし野ののあなたこなたに道みちはあれど

我わが行ゆく道みちは大まさ丈夫ぢうの道みち

◎渡わた邊なべしげ重はる春

耐たへ難がたきなつも軒のきは端はのしのぶのより

心こころすいしき風かぜは吹ふくなり

◎武たけだ田たこうん耕ん雲さい齋

咲さく梅うめの風かぜに空むなしく散ちるとても

馨かほりは君きみが袖そでにうつらん

◎有あり村むら治ぢ左さ衛ゑ門もん

君きみが爲ためつくす心こころは武む藏ざう野の

野の邊べの若わか草ぐさつゆとなるまで

三 讚さん仰かうすべき名めい歌か

さへられぬ光ひかりもあるをれしなへて

へだて顔かほなる朝あさ霞かすみかな

阿あ彌み陀だ佛ぶつと心こころを西にしにうつせみの

もぬけはてたる聲こゑを涼すずしき

月つきかげの至いたらぬ里さとはなけれども

法ほふ然ぜん聖せい人にん

同どう 上じやう

同どう 上じやう

詠むる人の心にぞすむ

阿彌陀佛に染むる心の色にいでば

秋の木梢のたぐひならまし

たまみがく露ぞ枕に散りかゝる

夢れごろかす竹のあらしに

水の音はさみしき庵の友なれや

峰のあらしのたへまゝくに

何事につけてか世をはいとはまじ

うかりし人を今はうれしき

柴の庵はすみうきこともあらましを

同上

西行法師

同上

同上

同上

同上

同上

同上

ともなふ月の影なかりせば

もろともに影をならぶ人もあれや

月のくれくるさとのいほりに

後の世もうれしかるべき道なれば

今日ゆく空ものごけかりけり

まごひゆく浮世のうらにもゆる火を

古里とのみ思ひけるかな

何事も云ふべきことはなかりけり

問はで答ふる松風の音

そらにのみ見るだにあかぬ月影の

同上

同上

道元禪師

同上

同上

澤水禪師

同上

同上

同上

水底みづそこにさへまたもあるかな
問ふ人とこもなき宿やどなれど来る春はるは 同上

八重やえむぐらにもさわらざりけり

梅うめの香かのかぎりなければ折たる人ひとの 同上

手てにも袖そでにもしみにけるかな

明日あすしらぬ我が身みとれもへごくれぬまの 同上

今日は人ひとこそ悲かなしかりけり

手てにむすぶ水みづに宿やどれる月影つきかげの 同上

あるかなさかの世よにこそありけれ

風かぜすいし月つきはさやけしいさごもに 貞寛上人

ねごりあかさん老おいの名なごりに

何事なにごともかわりのみゆく世よの中なかに

西行法師

同じかげにてすめる月つきかな

しのびねの涙なみだたふる袖そでの中なかに

同上

なづます宿やどる秋あきの夜よの月つき

もの思おもふ袖そでにも月つきはやごりけり

同上

にごらですめる水みづならねごも

さゝかにの糸いとに貫つらぬく露つゆの玉たまを

同上

かけてかざれる世よにこそありけれ

鷺わしの山やまた誰たれかは月つきを見みざるへき

同上

心にかゝる雲しなれば

船ばたに風のつぶてとうちつけて

蓮月尾

水にはもろきたまあられかな

埋み火に寒さ忘れてねたる夜は

同上

すみれつむ野ぞ夢に見ゆる

思ひなす心からこそ身のうさを

夢想國師

世のそがこのみかこちけるかな

琴の音に峯の松風かようらし

齋宮女御

いづれの緒よりしらべそめけん

鷺の山月を入りぬと見る人は

西行法師

くらきに迷ふ心なりけり

鷺の山上くからぬ嶺なれば

同上

あたりを拂ふ有明の月

れのが夜のふくるもしらで入る月の

同上

影ばかりとも思ひけるかな

ひとりすむ片山かけのともなれや

同上

嵐に晴るゝ冬の夜の月

あらし吹く嵐の木の間をわけきつる

同上

谷の清水にやどる月影

西へ行くこゝろに月のかけはれて

土御門天皇

すてぬ光りの誓をぞ思ふ

同 上

なげくとして袖の露をば誰かどふ

同 上

思へばうれし秋の夜の月

西へとや御法の門を教ふらん

同 上

さきだちてゆく秋の夜の月

宗良親王

露ふかき浮世の秋をあはれみて

鹿の苑にも月はやどれる

同 上

露しげき草の庵も月かげの

みがけば玉のうてななりけり

覺性親王

かるかやのしげみが下になく蟲は

れぼろなりとや月をみるらむ

同 上

くまもなく月澄み渡る秋の野は

花の陰こそくもりなりけり

同 上

ねやの上のあはぬ板間もとがならで

月にうれしき旅のいほかな

源實朝

大原やれほろのしみす里とほみ

人こそくまね月はすみけり

蓮月尾

ねがわくは後の蓮の花の上に

くもらぬ月をみるよしもかな

四 「人の道」と云へる法語の終りに

はり傳ふ鼠の道も道なれど

誠の道は人の行く道

かぎりなき人も車も牛馬も

道あればこそ行きかへりすれ

春に咲く梅が香ほごはあらずとも

道のかほりを袖にとりめよ

忠孝の道より外に道ぞなき

佛の道もこれよりぞ入る

神佛名はことなれど玉ぼこの

道の外には道とてもなし

法華經をとなふる鳥もあるものを

南無阿彌と呼ぶ人の少くなき

まぼろしの夢より夢の世の中を

覺めたり顔にさぐる人かな

五 法華經の心をよみて

赤染衛門

◎ 一 序品

いにしへの妙なる法を説きければ

今の光りもさかどこそみれ

○二 方便品 ほうべんほん

とされかで入りなまししかは二つなく
三つなき法を誰廣めまし

○三 譬喩品 ひゆうほん

燃ゆる火の家を出でてを悟りぬる

三つの車は一つなりけり

○四 信解品 しんげほん

親とだに知らでまごふか悲しさに

この寶をもゆづりつるかな

○五 藥草喩品 やくそうゆうほん

法の雨は草木もわかでそとげども

れのがした社うけまらりけれ

○六 授記品 じゆきほん

つぎくの佛に多く事へてぞ

蓮をひらく身とはなるべき

○七 化城喩品 けじやうゆうほん

こしらへて假りの宿りにやすめずは

ささの道には猶まごはまじ

○八 五百弟子授記品 あしじゆきほん

ころもなる玉ともかけてしらさりき

夢さめてこそうれしかりけれ

◎九 授學無學人記品

諸共にさとりを開くこれこそは

昔契りしゝるしなりけれ

◎十 法師品

すみがたき心しむるに止まらば

法とくことを稀になるべき

◎十一 寶塔品

大空に寶の塔のあらはれて

法の爲めにぞ身をばわけける

◎十二 提婆品

わたつみのみやを出でたる程もなく

さはりの外になりける哉

◎十三 勸持品

身にかへて法をれしまん人にこそ

忍び難きを忍びてはみめ

◎十四 安樂行品

名をあげてほめもそしらじ法をた

多くも説かじ少くもせじ

◎十五 涌出品

いかでかは子よりも親の若からん

老ては若くなるにやあらん

◎十六 壽量品

ありながら死ぬるけしきは子の爲めに

とめし薬をすかすなりけり

◎十七 分別品

佛にてわたるこふすを數へすば

塵ばかりだに知らずあらまし

◎十八 隨喜品

世の中にみてし寶を得んよりは

法を聞くべきことはまされり

◎十九 功德品

たもち難き法をかきよむ報には

みそすみさよき鏡なりけり

◎二十 不輕品

みる人を常にかろめぬ心こそ

終に佛の身にはなりぬれ

◎二十一 神力品

空までに至れるしたのまことをば

法をたもたん人ぞ知るべき

◎二十二 屬累品

流れても仇にすなとてかさなづる

得ること難き法をとけとて

◎二十三 藥王品

ともしつる我身一つの光りにて

あまたの國をてらしつるかな

◎二十四 妙音品

ことこのみありとやはみる何處にも

妙なる聲に法をこそとけ

◎二十五 觀音品

身をつけて普く法を説く中に

またわたされぬ我身悲しや

◎二十六 陀羅尼品

法守るちかひを深くたてつれば

末の世までもあせしとぞ思ふ

◎二十七 嚴王品

佛にはあふこと難きゆつること

こをゆるしてぞ親もすゝめし

◎二十八 普賢品

行末の法をひろめに來りける

誓ちかひをきくがあはれなるかな

六

維摩經ゆいまきやうのころろを讀よみて

◎如ごとし聚しゆほ法ふの

うき乍ながら身みにたとへん水の泡あはの

ためしに取とらば消きへぬべきかな

◎如ごとし泡あは

あめふれは水みづに浮うかべるうたかたの

久ひさしからねは我わが身みなりけり

◎如ごとし焰ほ

夏なつの夜よの火影ひかげにまどふ鹿しかみれば

たゞみづからの事ことにぞありける

◎如ごとし芭蕉せうの

秋風あきかぜにくたくる草くさの葉はを見みてぞ

身みのかたからぬことは知しらるゝ

◎如ごとし幻まほろし

幻まほろしにしほし形かたちをうけゝると

思おもふ心こころも夢ゆめにぞありける

◎如ごとし夢ゆめの

夢ゆめや夢幻ゆめうつや夢ゆめとわかぬ哉かな

いかなる世よにかせめんとすらん

◎如影ごとしかげの

水みづにうかぶ影かげは中なかにもあらねども

それをありとはたのむべきかは

◎如響ごとしなまき

いつまでか聲こゑも聞きこえん山彦やまひこの

よろづにつけて物ものを悲かなしき

◎如浮雲ごとしうきぐも

行くへなく空そらにたゞよふ浮雲うきぐもに

烟けむりを添そへん程ほどを悲かなしき

◎如電ごとしいなづま

いなづまの光ひかりといまる程ほどみれば

我が身みばかりの物ものにぞありける

七 普門品ふもんほんによする古歌こか

行く水みづのふかき流ながれにしづみても

浅瀬あさせありとぞ猶頼なほたのむべし

れり立たちてたのみとなれば飛鳥川あすかがは

ふちもせになる物ものと社こそさけ

さまぐにたなごゝろなる誓ちかひをば

南無なむのことはふさねたるかな

ねにをふる罪つみと聞きしも君きみがため

はなるとするもうれしかりけり
 常にれもふ心のまよによしやなご
 かさねしつまはれもひかへしつ
 さよ衣うらにも夢をさるとるかな
 重ねしつまをれもひかへして
 いそのかみふるのくさくら春ごとに
 しるもしらぬも尋ねてぞとふ
 三十あまりみつのちかひの嬉しきは
 さまたくになるすがたなりけり
 何國にはやごりにもれん水にはれ

木の間に見るも空の月かげ
 さまたくのこゝろつくしに行舟や
 歸るすがたにあふのまつはら
 恐れなき道にみちびくひじりには
 わがなにめで人にしらるな
 あはれとやともに光をてらしけん
 ふたつにわけし玉のかざりを
 つかへこし其ゆゑにこそ今もかく
 信の道にさはらざりけれ
 名を聞も見ると御法の燈を

くらき闇路やみぢのしるべにやせん

われとしる心こころのなくば人の身みに

愁うれひなげきもあらじとぞれもふ

障さわりなき心こころに應たうず誓ちかひにや

浪なみに入いりてもればれざるらん

わたつ海うみのふかき誓ちかひのあまねさを

頼たのみをかくる法のりのふねかな

れしなへて空むなしきそらと思おもひしに

藤咲ふぢさきぬればむらさきの雲くも

たのみてもなほたのむかな思おもふこと

むなしくすぎぬ人のちかひは

まよふべき後のちをれもへば此法このりを

心こころにすつるときの間まもなし

なき人の別わかれを鴛うしの音ねにたつる

思おもひよいけの水みづとたになれ

さだまれるすがたの物ものになきゆゑに

安やすや火ひをも水みづとなすらん

白浪しらなみもよせくる方かたにかへるなり

人ひとをなにはのあしとれもふな

罪つみもなき人ひとをうけへはわすれぐさ

れのがうへにぞれもふといふなり

あしかれと人をばいはじなにはがた

我身のどがのかへる白なみ

れろかなるあまのさかてもやがて身に

かへす恨みを思ひしらなん

我をなごこのみは人の忘ぐる

身にもれふてふむくひしらすや

よくれもへ科なき我はなけれども

恨は人の身にやかへらん

あふ事をいづくにこてかちぎるへ

浮身の行ん方もしらねば

つひにまたいかなる道に迷ふとも

ちぎりしまゝのしるべ忘るな

中天に行とも見ぬすしかすかに

あふげば高さ日の光かな

分わふるあじの障も今はなく

沖津ふねをも風にかかせて

しぐれつる雲をば風の吹すて

長閑に月のかげをさやけき

其さはもあらしこそ思ふ大悲者の

人をはごくむふかき心は

身をすてゝ人を救ばい世に主も

佛の道にかはりやせん

色々の千くさの花にしたがひて

結びかへぬる野邊の夕露

にごるべき流れも更になかりけり

心の水のすみもまさらば

月も日も出入かぎはあるものを

心の通ふ道ぞきはなき

ちかひをば千ひろの海にたごふなり

露もたのまばかすに入なん

誓ひける心のごかのうみなれば

人をわたすにわづらひもなし

見るめなき涙の底にしづむ身を

法のうみにも浮べてしかな

わたすべしちかいのふかき冬のうみは

氷も霜もむすばざりけり

れしてるや深き誓ひを大綱に

ひかれん事のたのもしきかな

歴劫の弘誓のうみに舟わたせ

生死しやうじのうみは冬ふゆあらくとも

八 傘松道詠かさまつだうか

道元だうげん和尚わしやうの和歌わかに堪能たんのうなりしことは何人なにびとも知る所ところであるか、
其中そのうちにはわれらが静養せいやうの公案こうあんとするに適當てきたりなものが多たほい、殊ことに
北條時頼ほつでうときよりの請こひに依よつて詠こいせられた十首じゅうしゆの中うちには、常つねに誦じゆじて妙味めうみ
渾々こんくたるものがある、

◎教外別傳けうぐわいべつでん

あら磯いその波なみもよせぬ高岩たかいわに

かきもつくべき法のりならばこそ

◎不立文字ふりつもんじ

いひ捨すてし其言そのことの葉はの外ほかなれば

筆ふでにも跡あとをどよめざりけり

◎正法眼藏しやうぽうげんざう

波なみも引風ひきかぜもつながぬ捨小舟すてこぶね

月つきこそ夜半よはのさかりなりけれ

◎涅槃妙門ねはんめうもん

いづもたい我がふる里さとの花はななれば

色いろもかわらずすぎし春はるかな

◎本来面目ほんらいめんもく

春はるは花夏はななつほととぎす秋あきは月つき

冬雪さるて冷しかりけり

◎即心成佛

れし鳥やかもめともまたみるわかぬ

立る波間にうき沈むかな

◎應無所住而生其心

水鳥のゆくもかへるも跡たゑて

されども道はわすれざりけれ

◎父母所生 身即證 大覺位

尋ね入る深山のれくのさこそもど

我が住みなれし都なりける

◎盡十方界眞實人體

世の中にまことの人やなかるらむ

かぎりも見へぬ大空の色

此外にも數多くあれど、今は省略す、

九 教訓和歌

◎明德

みな人のもとの心はます鏡

磨がばなごか曇りはつゝ

◎新民

こりにける奈良の都の習はしも

あらたまりゆく君が誠に

◎止至善

よしと見る其よきふしを難波江の

あしかる方に移さずもがな

◎正心

三輪の山杉たつ門を尋ね来て

直なる神の心をぞ知る

露すがる秋の上葉をよそへ見よ

かゝればたはむ人の心を

◎格物

我宿の千種の花を止めてこそ

色なき春のいろもしらるれ

白雪の幾重とみゑて越くれば

たゞ一筋の山路なりけり

◎修身

朝夕にたもつ我身はから衣

たち居にうつせ道のすがたを

思へたゞ身のあやまりを三笠山

さして心のがならずとも

◎致知

日越るつゝふみ見るにこそ玉銚の

道のたくれを白河の關

月花も馴て見るこそ勝りけれ

さりどてかはる色香ならねど

◎誠意

色見へぬ心の水は濁江の

草のはつかに露もにごすな

うば玉の夜を照さずばからにしき

晝もうらなき色とみましや

人知らぬ心に耻ぢよ耻ぢてこそ

終に耻なき身にもなるらめ

◎治國

知るや如何に民のかまごに立つ烟

何事も見めるめかひある國なれや

いづく夕暮のながめなりとは

◎齋家

いつまでもともに汲井の底清み

むせびもかはせもこの心を

秋風をよそにのみ聞け家の内

ひと言のはのうらみなければ

◎平天下

九重の夜の玉衣袖さむみ

ねほふばかりに世を思ふらん

春風の吹くとはなしにれのづから

のどかに見ゆる夜の海づら

一〇 世の中を何にたとへん

源順と云ふ人、應和元年七月十一日に四歳の女児を失ひ、同年の八月六日には又々五歳の男児を失ひました、そこで大に世の無常を感じ、悲哀の情に堪へかねまして、萬葉集の中にある沙彌滿哲と云ふ人の歌に「世の中を何にたとへん」と云へる言を取り、之を頭に載いて左の歌をつくられました。

世の中を何にたとへんあかねさす

朝日まつ問の萩の上の露

世の中を何にたとへん夕露も

またできゑぬる朝顔の花

世の中を何にたとへん飛鳥川

さだめなき世にたぎつ水の泡

世の中を何にたとへんうたゝねの

夢路ばかりに通ふ玉ぼこ

世の中を何にたとへん吹く風は

行衛もしらぬみねの白雲

世の中を何にたごへん水早み

かつくづれゆく岸の姫松

世の中を何にたごへん秋の田を

ほのかに照す宵の稻妻

世の中を何にたごへん草も木も

かれゆく頃の野邊の虫の音

世の中を何にたごへん冬を浅み

降るとはみれどけぬる白雪

一 靈告集

◎石清水八幡

いにしへの我名を今にあらはして

◎玉林和歌集

南無阿彌陀佛といふぞ嬉しき

極樂へ生れんと思ふ心にて

◎玉葉集

南無阿彌陀佛といふぞ三心

谷川の木葉がくれのうもれ水

◎同上

流るゝもゆくしたゝるも行く

しほりせで深山のれくの花を見よ

◎同上

たづね入りては同じにはひぞ

よしあしの心ありとも疑はで

◎四恩論

寝てもさめても念佛忘るな

◎宇佐八幡

そしりても南無阿彌陀佛と四方の人
かりにも云へば後はたのもし

玉林集

◎若宮

後の世のたのみのあるを願ひつゝ
何いのるらん彌陀を念せよ

同上

◎熊野權現

賤しきも高きも人のれしなへて
南無阿彌陀佛といふぞうれしき

玉林集

一聲も南無阿彌陀佛と稱ふれば

同上

彌陀の浄土へうまれこそすれ
明日までとたのむ心をすてはて

同上

南無阿彌陀佛をつねにとなへよ
道遠く年もやう／＼老ひぬれば

四恩論

れもひれこせよ我もわすれじ
色ふかく思ひけるこそうれしけれ

玉葉集

もとの誓は更に忘れじ
我はこれ十萬億のあるじにて

泉州悲田院元靈告

人を教へてかへりこそすれ

◎新熊野權現

寝ても又さめても絶へず世の人の

宝林集

南無阿彌陀佛といふぞうれしき

◎聖眞子權現

千早ふる玉の簾をまき上げて

本懐集

念佛の聲をまきぞうれしき

◎箱根權現

ばやくたい彌陀の誓にまかせつゝ

宝林集

南無阿彌陀佛を忘るなよ人

◎多賀明神

何とてか命れしむぞみな人の

同上

死なぬ國をばねがはざるらん

◎白山權現

またなまも清きも更にへだてなく

同上

南無阿彌陀佛といふぞ佛よ

◎立山權現

世の中に誠のつとめあらざれば

同上

心をとめて彌陀佛といへ

◎阿蘇明神

たのみつゝ衆生の心すぐならば

同上

われは炎にもゑまじものを

◎北野天神

拂ふべき心の塵もなかりけり

肩 吉

南無阿彌陀佛の風の前には

◎春日明神

われゆかんゆきて守らん般若臺

釋迦のみのりのあらん限りは

またもまたあらばや人に教ゆべき

南無阿彌陀佛の御名の外にぞ

一一 辭世集

◎介石上人

法の爲め國の爲めとて身の限り

つくして果てん倒れふすまで

◎淺野長矩

風さそふ花よりはなほ我はまた

春のわかれを如何にとやせん

◎黒田如水

訴訟喧嘩地震 雷 火事晦日

飢饉疾病の無き國へ行く

◎地黄坊樽太

南無三寶あまたの樽を呑みほして

身は空樽に還る故郷

◎大石主税

極樂の道はひと筋君と共に

阿彌陀を添へて四十八人

◎小野寺秀留

今朝ははやいふ言の葉もなかりけり

なにの爲めとて露むすぶらん

◎道場坊祐覺

大方の年の暮ぞと思ひしに

わが身のはても今宵なりけり

行で見ても又來てみても同じこと

◎深草正念坊

こゝらで一寸死んでみようか

◎山田又助

ちるもよし吉野の山の山櫻

花にたぐひし武士の身は

◎眞木保臣

惜まれて玉と散る身はいさぎよし

瓦と共に世にあらんより

◎宗良親王

君がため世の爲め何か惜からん

捨て、甲斐ある命なりせば

◎豊臣秀吉

露とれき露とさるぬる我身かな

難波のことは夢の又夢

◎大内義隆

打つ人も打たるゝ人ももろともに

如露亦如電應作如是觀

◎三浦義憲

打つものも打たるゝものも土器よ

碎けて後はもこの土くれ

◎一休禪師

今迄は死なれぬ程にいさるなり

死なるゝ程に死ぬるなりけり

◎蜀山人

今迄は人の事だと思ふたに

それが死ぬのかこいつたまらぬ

◎十返舎一九

この世をばごりや御暇の線香の

けむりと共にハイ左様なら

◎宗因

宗因をどこへと人の問ふならば

チト用ありてあの世へと云へ

◎中倉忠宣

何やらに忠宣といふ名をつけて

月よ花よとさはぎけるかな

◎南新二

われ死なばあとに残れる鬮體

叩いてみれば音はこつこ

◎圓知房

れちて行く奈落の底をのぞき見む

いかほど慾の深き元ぞと

◎西行法師

佛には櫻の花をたてまつれ

我が後の世を人とならはい

◎宗尊親王

ありて世のかひやなからん國のため

人の爲めぞとれもいなさずは

◎楠正行

かへらじとかねてれもへば梓弓

なき數に入る名をぞ留むる

◎新田義貞

我袖の涙に宿る影をだに

知らで雲井の月やすむらん

◎北村季吟

花も見つ郭公をも待ち出でつ

此世後の世思ふことなし

◎式亭三馬

善もせず悪も作らず死ぬる身は

地藏もほめず閻魔叱らす

◎北條氏政

雨雲の覆へる月も胸の霧も

拂ひにけりな秋の夕風

我身今消えやいかに思ふべき

空より來り空に歸れば

◎北條氏照

吹と吹風ないさひぞ花の春

紅葉の残る秋あらばこそ

一三 圖 贊

◎大黒天の贊

大黒だいこくのくろき姿すがたは皆みなしれど

しろき心こころをしる人ひとぞなき

◎鬼おにの念佛ねんぶつの賛さん

たい申まうせ角つのはありとも本願ほんぐわんの

中なかにはもれぬ鬼おにも十八

◎自畫じくわ自賛じさん

わが庵いほは地獄ぢごくのとなり餓鬼がきのそば

世よを牛部屋うしべやとすぢむかひなり

◎雪佛ゆきはつていの賛さん

造つるるのみ何なにはかなしと思おもふらん

◎學信上人

◎同 上

この身みこのまゝ雪佛ゆきはつていなり

◎佛ぶつの賛さん

御佛みほとけのひかりを己おのが心こころにて

むねの鏡かがみのくもりあらずな

佛ほとけとは誰たがさゝそめて白糸しらいとの

むすびもとめぬ峯みねの松風まつかぜ

◎父母ふはの像ぞうに

面影おもかげを千代よに傳つたへて父母ふはの

ありし教をしへを思おもひはなつな

◎達磨だるまの賛さん

◎田靜翁

◎慈雲尊者

壁と彌陀にらみ處は違へども

れまいは九年わしは十念

○瓢箪の賛

うか／＼と暮す様でも瓢箪の

胸のあたりにしめく／＼りあり

○蛙の賛

世の中の蛙のつらへつらなりて

水かけ論をせぬは此君

○銅の賛

よきこによあしきになよなべて世の

○天細和尙

○行誠上人

○百河樂翁

人の心は自在鍵なり

一四 父母の十恩

○一 懐胎守護

唯しばし露をやごせる草の葉も

ねさふし易きものごかは見る

○二 臨産受苦

いぎしにの海の波間をわけてこそ

この白玉はかつきあげしか

○三 生子忘愛

うぐひすの谷のと出る一聲に

○税所篤子

こそこの寒さは忘れはてつゝ

◎四 麤苦吐甘

山がらす軒の雀も朝夕に

れのが爲めにはあさらぬものを

◎五 回乾就濕

思ひ子の濕るゝことをしみてこの

海に我が身はうきてねにけり

◎六 乳哺養育

たらちねのほそちにかけてつながらずは

たまのれことはねも絶なまじ

子の爲に洗ふつゝりのいとまなみ

◎七 洗濯不淨

つゝるのもとにたゝぬ日もなし

◎八 遠行嚴念

峰ついき花より花に遊びけり

まつらん親の心しらずに

◎九 爲遠惡業

子を思ふ關こそやがて後の世の

くらきに迷ふしるべなりけれ

◎十 究竟憐愍

世を救ふ三世の佛の心にも

似たるやれやの心なりけり

一五 なき母の忌日に

いかにせん憂目にたへぬ我身より

よはりもすらん老の玉の緒

うきをのみみせつる子ぞとすてもせで

なほ思ふらん親心かな

稚兒をあはれ思へば山をぬく

力も今はくつれれぞする

覺る間もぬる間もみゑてかなしきは

田高橋幸祐

いわけなき子のあそぶ佛

一六 心と身

心から流るゝ水をせきとめて

己れと淵に身を沈めけり

心より外には法の船もなし

知らねば沈む知れば浮みん

心から心に物を思はせて

身を苦しむる我身なりけり

心だに身に随はぬ世の中に

人の背くはとがならばこそ

心とぞ人に見すべき色ぞなき

たゞ露霜の結ぶのみして

心だに曇りなければいと猶

鷺の御山に月はさるけり

心だに正しくなさは賤が男も

やがて其身を世に立つるなり

心だに素直になして用ゐなば

皆なす業は道に協はん

心こそ身の關守となりけり

やすく出べき此世なれども

身と心たゞ安かれと思ひなば
 知足の二字を常に忘るな
 身の業の善きにうなづき悪きには
 かぶりをふるか頭役なり
 身の上に浮き沈みある世のならひ
 貧なる時に辛抱をせよ
 身はやしる心の神をけがさじと
 祈る人こそ福壽榮ゆる
 身の上は我にて見へぬものなれば
 人を鏡になして慎め

身を弓に心は矢にてひきためて

向ふの的の黒星を射よ

一七五 倫

◎君 臣

時しあれば谷より出る鶯に

世をたすくべき人をとはばや

身にかへて思ふとだにも知らせばや

民の心の治め難きを

鳥の音に驚かされて曉の

ねざめしづかに世を思ふかな

◎後宇多天皇

◎後醍醐天皇

◎後村上天皇

れもひかぬ入りにし山をわけいで

迷ふ浮世も我君の爲め

◎父子

なくくも別れし時を別れにて

別るゝ親のなきぞ悲しき

世の中にれもひあれども子をこふる

思ひにまさる思ひなきかな

人の親の心は闇にあらねども

子を思ふ道に迷ひぬるかな

薩摩瀉沖の小島にわれありと

◎藤原師賢

◎加茂真淵

◎紀貫之

◎藤原兼輔

◎平康頼

親には告げよ八重の汐風

菅公母

久方の月の桂もれるばかり
家の風をも吹かせてしかな

◎夫婦

石見のや高角山の木の間より
柿本人麿

わがふる袖を妹見つらんか

菊池武時

ふるさとに今宵かぎりの命とも
知らでや人の我を待つらん

檀越妻

神風の伊勢の濱荻ねりふせて
旅ねやすらんあらし濱邊に

◎兄弟

埋火のあたりのごかに兄弟の
定信

まさいせし世を戀しかりける
重家

むさし野のわが紫の衣手は
ゆかりまでこそうれしかりけれ

◎朋友

一日だに見ねば戀しき君がいなば
弱信

年の四年をいかい暮さむ
看佐

君が植し一村すいき虫のねの
茂き野邊ともなりにけるかな

棹させざることひもしらぬわたつみの
①貫之

ふかき心を君に見るかな

一八五時

◎華嚴

朝日影高根の花は匂へども
①皇太后宮太夫俊成

麓の人は知らずぞありける

◎阿含

鳴く鹿の園の中なる小薄の
①慈鎮和尚

しばしなびきし風ぞ悲しき

◎方等

説く佛一つの御法きく人の
①尚 上

ささる心はれのがさまぐ

◎般若

雲も皆空しと説くに空はれて
①皇太后宮太夫俊成

月ばかりこそすみまさりけり

◎法華涅槃

れしなへて御法の花のさきしより
①慈鎮和尚

佛の身とは皆なりにけり

一九三身

世の中は皆佛なりれしなへて
①花山院

◎一 法身

法の身の月は我が身をてらせども

半觀法師

無明の雲の見せぬなりけり

◎二 報身

もちいうくるほどはかた／＼かはれども

慈鎮和尚

一つ悟りの報ひなりけり

◎三 應身

とにかくに人の心になふ身は

同上

もとの都を出つるなりけり

二〇四 大

よしもなく地水火風をかりあつめ

無住上人

我れと思ふも苦しかりけり

あやまりに影を我れぞと思ひそめて

まことの心忘れはてぬる

◎一 地

世の中に我が物どてはなかりけり

慈鎮和尚

身をさへ土にかへすべければ

さざし出る物はさながら其もの

地體なりとはささるべきなる

◎二 水

胸むねの月つきも今いまやうかまん四方よものことも

肩 上

潤うるほす水みづにすむ心こころとは

◎三 火

れもしれ民たみの街ちまたにたく火ひこそ

肩 上

かつく闇やみの夜よのてらしけれ

◎四 風

れちこちの風かぜとぞ今いまはなりなまし

肩 上

かいなさものは我身わがみなりけり

二一 十重禁戒

たちならぶれきての重おもき橋はしばしら

頓乘院戒願

いく世よ々かけて人渡ひとわたすらん

◎一 快意殺生戒

後のちの世よの闇やみは照てらさぬかゝり火びを

しばしたのみてうぶねさすらん

◎二 劫盗人物戒

あるじなき花はなの下影したかげかようにも

たもと拂はらひて香かをなごめそ

◎三 無慈行欲戒

花はなづまをとわん男鹿おしかの道みちもあり

はぎの錦は露なみだして

◎四 故心妄語戒

山ぶきの咲きてみのらの言の葉は

るこそ云はねど堅く契れよ

◎五 沽酒生罪戒

さくの露うるをいめとの御法こそ

心みだれぬふしとこそなれ

◎六 談他過失戒

四方の海の底の藻屑をかきわけて

みわたす玉のさづなどがめそ

◎七 自讚毀他戒

こゝはよしかしこはあしと波立て

こぎなみだしそ浪華江の船

◎八 慳生毀辱戒

物をこひ法を求めばあはれみて

ゆみなれしみぞはちなあたへふ

◎九 瞋不受謝戒

あやまちし人のわびぬる憐れさを

れもひやりてもものないかりそ

◎十 謗三寶戒

よぶ聲も三の寶ときこゆれば

あしとはなひぞとりの名をだに

三聚淨戒

いましめの三のかけはし渡らずは

頓乘院戒順

川のおくたの底に沈まん

一 攝律儀戒

浪華江の水底かきて芦が根の

あどたゝんまでかり盡さなん

二 攝善法戒

よき種と見ゆる限りは皆まきて

御法の春のさくを待たなん

三 攝善生戒

迷ひをば絶し果してたのしみの

ついに盡させぬ身とはなさなん

四弘誓願

衆生無邊誓願度

誓をば地藏菩薩にならはんと

行誠上人

あかつきごとに我をいざなへ

煩惱無盡誓願斷

朝日にも喩ふる法の光りには

深き闇路ものこらざるらん

◎法門無量誓願學

法の海よし如何ばかりふかくとも

汲みほすまでは汲まんとぞ思ふ

◎無上菩提誓願證

わされてはよその梢とれもひにさ

阿耨菩提はこの身なりしを

二四 五 戒

◎殺生戒

我も又れしとこそ思へれしと思ふ

○行誠上人

命は同じ命ならずや

◎偷盜戒

みるめこそしばしはからめたりたちて

かつかはうらの海人やとがめん

◎邪淫戒

まねくともれ花が袖は心せよ

あらぬ荒野に道や迷はん

◎妄語戒

呼子鳥よべばこたふる山彦の

それもまことの聲にやはある

◎綺語戒

いろくくに句ふ言葉の花よりも

われは岩根の山吹の花

二五 六通

◎天眼通

春秋のへだてもあらで見ゆるかな

吉野龍田の花も紅葉も

◎天耳通

老ひといふこともあらざる國なれば

耳も遠くはならずとぞ聞く

○行誠上人

◎他心通

諸人の思ふことくうつるなり

心の鏡くもりなければ

◎宿命通

ゆめならで見られざりけるいにしへの

世々の人をも今日みつるかな

◎神足通

ふみわけてゆくに障をなかりける

燃ゆる炎も結ぶ氷も

◎漏盡通

五月雨も今宵ははれてもるものは

あしの篠屋の月にぞありける

二六 十界

◎地獄

れそろしき地獄の底の鬼とても

れのが吹き出すものと知らずや

◎餓鬼

袖ぬれしみぎわの波も音がへて

ほのほばかりぞもねわたるなる

◎畜生

○行誠上人

父と云ふ名をだにしらぬみのむしの

身の果ていかにならんとすらん

◎修羅

果てもなくたもひあかりし心より

あそらとまでの名はねひにけむ

◎人間

うれしくも人と生れて御佛の

さどりの道もこれよりぞ入る

◎天上

ひく人のしばしばかりのゆるびまり

もく人のしれもひあかれぬいかのぼりかな

◎聲聞

なく聲もさりのほのく聞ゆらん

鹿の園生の秋の夕暮

◎縁覺

朝風に峯の木の葉の散る見れば

一葉々々にさとりなりけり

◎菩薩

三十あまり三つのうみ船さす棹の

ひまやなからん慈眼視衆生

◎佛界

夜もすがらとなふる三世の御佛の

みなは昔の我が名ならずや

二七三 毒

◎貪

天が下皆我が物となれるにも

猶物たらぬ心ちこそすれ

◎瞋

いが栗のとげくしさの身の末や

れちて如何なる火にやなるらん

行誠上人

◎痴

はらくろき人の心やぬば玉の

闇路をたどるたねとなるらん

二八

神儒佛

◎神

あま雲をしなごの風にはらはれて

高まの山の月ぞさやけき

◎儒

しまくのやまと錦に織りてこそ

から紅ひも色にはへあれ

光格天皇御製

◎佛

世の中の秋のはちすの花も實も

ねちてむなしき教へなりけり

二九

國恩

◎治世安穩恩

法の舟やすくわたるは四つの海の

浪しづかなる恵みなりけり

◎善悪賞罰恩

恐るべし人をたのしのみす鏡

善さも悪しきもかくれざりけり

映

鏡

興

仁

◎生涯撫育恩

れしなへて民なでしこにれく露の
めぐみを下す天が下かな

靈山

◎邪法對治恩

法の道けがさんとするちりあくた

柳叟

たいしき風の打ち拂ひつゝ

◎佛法外護恩

神路山ふたらの山のまもり得て

康圓

世にさやかなる法の月影

◎當今の御改政をかしくみて

民草のみをやすくせん爲めにとて

柳叟

れごりの花をはよく御代かな

三〇 詠史

◎物部大連佛教を拒む

あらそひし君が櫻と散しより

世に榮わたる花はちすかな

◎醍醐天皇寒夜に御衣を脱す

さゆる夜にぬぎしみけしの薄きより

厚きめぐみを世にあふくかな

◎菅原道實筑紫に貶謫せらる

あまつ空そらころつくしゆきりはれて

田本居太平

つきの都みやこにかげぞさやけき

◎平重盛父を極諫す

あだ波なみの上うへにねさせしあら磯いその

小松こまつを千代よよの操みさほみせける

◎安徳天皇西海あくとくてんわうさいかいに没もつす

雲くもの上うへをたつのみやこに住すみかへて

三〇 いる日ひ悲かなしき西にしのうみづら

◎嘉永かへい癸みづ丑米艦いかにん我國わがくにに來きたる

村雲むらくもの一ひとしぐれなるあめりかは

てる日ひの本もとになにさわるべき

◎楠くすのき正成まさなりの妻つま其子そのこ正行まさゆきを訓戒くんかいす

ちのみのちよばかりかははよそばも

散ちるべき時ときを子こに教をしへけり

◎青砥あをこ藤綱ふぢつな

なめりかは寶たからもとめしかいり火びは

流ながれて後のちの世よを照てらしつゝ

◎楠なん公こう

ものよふの心こころよすべき湊川みなとがは

たかきは波なみの音ねばかりかは

三 佛教に就て

◎ 佛教

ことの葉も及ばぬ法の道芝を

田頓阿法師

心の外は誰を問はまし

◎ 同

折り得ても心ゆるすな山櫻

田佛國禪師

さそう嵐のありもこそすれ

◎ 難値難遇

一時もあだにはならじさりとは

田西行法師

値ひ難さ身の暮れ易き日を

めしひたる龜も浮木に値ふものを

いつまでしつむ我身なるらん

◎ 人身難受

うれしくも人と生れて御佛の

田行誠上人

さどりの道もこれよりぞ入る

◎ 佛教

照り渡る鷺の御山の月影は

如何に久しき光りなるらん

◎ 佛法と世法

佛法と世法は人の身と心

田澤庵和尚

一つかけても立たぬなりけり
◎佛法

聲づから耳に聞ゆる時しあれば

◎道元禪師

我が友ならぬ語らひぞなき

◎雪山求偈

身をすてし雪の御山の雪よりも

◎行誠上人

ふかきは法のみごりなるらん

◎題しらす

春は花夏は橘秋は菊

いつもねるせぬ法の花山

花は花紅葉は紅葉そのまゝに

いはで教ふる法の花山

三三 信仰に就て

◎聞思修

耳に聞き心に思ひ身に修せば

◎道元禪師

いつか菩提に入相の鐘

◎一心不乱

ひとすぢに心かけずはさゝかひの

◎行誠上人

くものいかきもかゝらざらまし

◎信心

まことあればかなわぬ道もかなふなり

善惠上人

まして佛の誓ひある世は

◎題しらす

我なくば彌陀も正覺よもとらじ

和泉式部

我れこそ彌陀の智識なりけり

◎念佛

阿彌陀佛と稱ふる聲を揖にして

源俊賴

苦しき海をこぎわたるかな

◎同

阿彌陀佛と稱ふる聲に夢さめて

撰子内親王

西へ傾く月をこそ見れ

◎同

阿彌陀佛といふより外は津の國の

圓光大師

なにはの事もあしかりぬべし

◎同

家の犬狂は狂へ名號の

嵐早三位

杖取る身には何かれそれん

◎生死一如

雨あられ雪や氷とへだつれど

解くれば同じ谷川の水

◎同

如何いかなれば雪ゆきや氷こほりさへだつらん

◎解とけぬも同なじ谷川たがはの水みづ

◎信しん為か能のう入に

まことある心こころにさけば入相いりあひの

◎鐘かねの音ねにも驚おどろかるべき

◎煩惱はんなん即すくは菩提だい

濁にごりなき心こころの氷みづにすむ月つきは

◎波なみもくだけて光ひかりとぞなる

◎南無阿彌陀佛なむあみだぶつを折句せきごに

◎行誠上人

◎承陽大師

欠

MISSING

◎萬法唯心

よしあしのうつる心の水鏡

よく／＼見れば我が姿なり

◎唯我獨尊

霞みては時め花の王にさへ

笠をぬがさる春の夜の月

◎萬法唯心

神と云ひ佛と云ふも世の中の

人の心の外のものは

◎平等一如

中興和歌

田橋 洲

源 實 朝

九四五

軒くちてくづれかゝりし賤が家も

一つにてらす秋の夜の月

◎常住

散ればささきせばまた散る春毎の

花のすがたは如來常住

◎即心是佛

我心其の儘ほとけいさばとけ

波を離れて水のあらばや

◎三世の父母

ほろくと鳴く山鳥の聲さけば

◎傳教大師

父かと思ふ母かと思ふ

◎靈鷲山

鷲の山つねにすむらふ嶺の月

◎元政上人

かりに顯はれかりにかくれて

◎人道

世の中に神の道とて道あらば

◎羽倉東滿

人の外なる人や學ばん

◎無心

いへばうし云はねば胸にさわがれて

◎二休の母

思はぬ先や佛なるらん

◎佛道

曇りなき世の光りにや春日野の

◎上東内院

同じ道にも尋ねゆくらん

◎因果應報

よしあしの報ひを知れな世の中の

◎政為朝臣

勇みあるにも歎きあるにも

◎諸病悉除身心安樂

月花をいのちとなせば世の中に

◎行誠上人

れもひわづらふ春秋もなし

世の中はこころやましき事もなし

花も紅葉もみな樂にて

◎棄恩入無爲

やがてまた立ちかへるべき門出とは

◎同 上

れもいながらもぬらす袖かな

◎妻子珍寶及王位臨命終時不隨者

上もなき玉のうてなもれく露の

◎行誠上人

しばしけぬ間の光なるらん

◎怨憎會苦

花たらず風はやごりを誰かしる

◎素性法師

我に教へよ行きてうらみん

◎衆生無邊誓願度

生き死にの川に世を経て渡し守

釋契仲

渡しはてすば掉もれさめじ

◎不淨觀

和田津海をみなかたぶけてあらふとも

前參議教長

我が身の内をいかで清めん

◎法門無量誓願學

山は塵海は零をいとはねば

釋契仲

道てふ文は學びてしかな

◎光明無量

いづくにも有明け月のさやけきに

源俊賴

いと朝日の光りそふらん

◎無自性

心とて人に見すべき色ぞなき

道元禪師

たゞ露霜の結ぶのみして

◎應聲即現

背向して身は迷ひ子の泣く聲を

三位重豊

聞きたらちめの捨て置かめや

◎不生不滅

いづくより生れ來るともなきものを

夢窓國師

かへるべき身と何なげくらん

◎未嘗睡眠經 行林中

ぬる夜なく法を求むる人あるを

夢の中にてすぐる身ぞうき

◎歸依三寶

うれしくも釋迦の御法にあふひ草

かけても外の道はふまめや

◎藥草驗品のこころを

雲しきてふる春雨はあかねごも

秋の垣根はれのがいろく

◎選子内親王

◎道元禪師

◎慈覺大師

◎佛性

眞如とは手にも取られず眼に見えず

墨繪にかさし松風の音

◎念稱諸佛

一聲に三世の佛の名をこめて

唱ふる中に唱へぬはなし

◎機類萬差

ことたらぬ事な思ひぞ鴨の足の

短くてこそ水かさもあれ

◎性惡性善

◎弘法大師

人皆の心の奥のかくれ家に

鬼も佛も我もこもれり

◎心生種々法生必滅種々法滅

心から流るゝ水をせきとめて

已れと淵に身を沈めけり

◎釋迦入滅彌勒出世

鷺の山入りゆく月の後にまた

出づべき御名を聞くぞうれしき

◎因果歴然

後の世の報ひを思へ曲れるも

◎慈鎮和尚

◎行誠上人

直さも同じ我が影を見て

◎後五百年鬪諍堅固 (鬪淨品)

花園は名のみなりけり此頃は

朽木がちなる志賀の故郷

◎由二妄念二故沈生死 (心地觀經)

あともなき風にあらそう心より

迷ひの浪や立ちさはぐらん

◎常在靈鷲山 (法華經壽量品)

鷺の山高嶺にのみとさししかど

我軒端にも有明の月

◎娑羅雙樹

傳へ聞く鶴の林の夜半の聲

皆子を思ふ言葉なりけり

◎佛種從緣起 (法華經方便品)

打かへし思へば春のあられ田も

菩提の種を蒔く處なる

◎得二淺所 (法華經普門品)

淺瀨得しことは嬉しとれもひしは

まだふかゝらぬ證りなりけり

◎一切衆生悉有佛性 (涅槃經)

れしなへて證りの花の種とさけば

うれしきものは心なりけり

◎唯一乘法無二亦無三

ふたと云ひみと云ひかへてみつれども

同じ一つの玉くしげなる

◎聞法能行此亦爲難 (大無量壽經)

立けならぶ甲斐こそなけれ櫻花

松に千年の色はならはで

◎他力專念

西の海みちびくしほにまかせつゝ

◎九條前内大臣

それとはさゝぬ法の早船

◎宿命通

今ぞしる世々を心にてらしつゝ

了然上人

人の鏡と云ひしまことも

◎入涅槃

今もなほ曇りて空にのこるらん

行誠上人

其きさらぎのもちのよの月

◎四十八願

其名こそ數はかぞふれまことには

同上

限りしられぬ誓なるらん

それとはさゝぬ法の早船

◎宿命通

今ぞしる世々を心にてらしつゝ

了然上人

人の鏡と云ひしまことも

◎入涅槃

今もなほ曇りて空にのこるらん

行誠上人

其きさらぎのもちのよの月

◎四十八願

其名こそ數はかぞふれまことには

同上

限りしられぬ誓なるらん

◎愛欲榮華不可常保 (無量壽經)

紅葉見し秋は昨日の夢の間に

同上

よはふりかはる村時雨かな

◎信解品のころろ

衣手にかゝりしものを白玉の

同上

しらで幾世とすごしまつらん

◎如蓮在水 (湧出品)

五つゝまで濁りににぐる世の中の

同上

花とも見ぬ花はちすかな

◎普門品のころろ

世を救ふ道には誰かいらざらん

如月法師

普き門は人し指さねば

◎法燈火

立ちならぶ影やなからん萬代の

覺空上人

後まで照す法の燈火

◎三世

この世のみ世とな思ひぞ後の世も

行誠上人

その後の世も同じ世なるぞ

◎觀念

身をせむる心の外にあだぞなき

見るに付けても聞くにつけても

◎大小乗

山の端のほのめく宵の月影に

道元禪師

光りもうすく飛ぶ螢かな

◎我心

よもすがら佛の道をもとむれば

熏心僧都

我が心にぞ尋ね入りぬる

◎大白牛車

小車に法の大路を進みゆけ

遅き早きは己が心を

○毘盧舍那

生死の道は幾千百ありもせめ

原坦山

遠近なきは毘盧舍那の里

○樂王菩薩品

のりの爲め身をば薪になしてこそ

行誠上人

さつても消ぬぬ烟りなるらめ

○四大假和合

引よせて結べは柴の庵りかな

とくればもこの野原なりけり

○諸法實相

から／＼と唐も大和も秋の田の

行誠上人

鳴子の音はかわらざりけり

○末法濁世

如何して光りそへましともすれば

覺圓僧正

消ぬなんとする法の燈火

○因縁生

櫻木を折り得てみれば花もなし

春こそ花の種となりけれ

○清濁不二

かはらじな濁るも清むも法の水

鴨長明